平成 22 年 9 月 19 日

関係各位のみなさま

報 徳 二 宮 神 社
宮　　司　草山　明久
責任役員　二宮　精三
責任役員　小笠原　清

報徳二宮神社　まちづくり推譲事業について

謹啓　時下ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。
また、日頃は格別のご厚情を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

さて、この度報徳二宮神社では「まちづくり推譲事業」を行うこととといたしました。
詳細につきましては、後述をさせていただきますが、今後、現在おこなっている博物館を中心とした報徳思想の普及・啓蒙活動と併行し、地域で輝きを失いかけているような「徳」に焦点をあて、たいへん微力ながら報徳思想と報徳仕法の基本に則り、ヒト（ひとびと）・モノ（物産など）・カネ（お金）が、できる限り地域に循環する仕組みの再構築を目指してまいりたいと思います。

今後も絶大なるご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。　謹白

報徳二宮神社　まちづくり推譲事業とは

【はじめに】

18 世紀ヨーロッパで起きた産業革命以降、工業化がもたらした経済成長は、我が国においても昭和の高度経済成長期をピークとし、この平成の時代に入るとバブル経済の破綻を経て、「ただ儲かれば良い」とする経済（利益）至上主義へと進み、現代社会において、さまざまな問題や矛盾を引き起こしています。

現在、国際標準化の中、コンプライアンス・ＣＳＲ・エコ・環境問題などの言葉をよく耳にしますが、外国から学ばずとも、元来日本人の心には、こうした心がありました。

報徳流に置き換えればコンプライアンスは「至誠」に、ＣＳＲは「推譲」と同義と捉えることができます。また、自然の中で体得したその思想は、エコや環境にも適合する教えであり、「格差問題」についても、貧者救済の教えが現代においての実践に役立つものであります。

今、新しい時代への転換がもとめられる現代において、「世の中に生きる全ての人の幸せ」のために、「道徳と経済の一元」を実践し、調和のとれた持続的発展を続ける社会を目指した尊徳翁の思想が、今こそ必要なのだと思います。

【事業趣旨】

ヒト・モノ・カネが地域に循環する、持続的発展が可能な社会をめざして。

情報や流通などの発達により、世界においては国境や言葉や文化の壁を超えたグローバルな社会基準が形成され、自動車産業や電機産業をはじめ日本の大企業も活躍をしていますが、日本国内、特に中小企業や農林水産業においては少子高齢化社会のなか、人口減少や大規模チェーン店等で販売される安価な海外商品との過当競争の中で、さま ざまな問題が山積しています。そして省みればこの間、物質的には非常に豊かな社会になったとはいえ、精神的には元々日本人が持っていた良さや伝統は薄れ、「自由」という言葉の意味をはき違えた「無責任」が横行し、どんどんと人間関係が希薄化し、日本の社会・地域コミュニティーが崩壊し、文化の継承が途絶えているように思えます。

この時代を生きる私たちには、今後ますます消費の減少や労働人口の減少が顕著になっていく未来を見据えて、右肩上がり・経済一辺倒の考え方から、この時代に対応でき得る新しい心豊かな社会づくりへの発想・業態の転換が求められています。

現在、日本各地でも新しい時代への取り組みとして、環境問題・教育・福祉を含んで「まちづくり会社」「ＮＰＯ法人」などを筆頭に、行政や民間主導でのさまざまな取り組みが行われており、ここ小田原においても行政における無尽蔵プロジェクトや民間団体それぞれが主体となって、多くの活動が行われております。

「報徳二宮神社　まちづくり推譲事業」は、こうした活動とほぼ趣旨を同じくするものではありますが、その考え方と手法は当社の御祭神である、二宮尊徳翁が江戸時代に実践した「報徳思想」「報徳仕法」であり、その精神と手法に則り、今後小田原を中心と

した神奈川県西湘地域に、今まで以上にヒト・モノ・カネが循環し、未来の子供たちの世代においても持続的発展を遂げられるように、「経済と道徳一元」の教えのもと、今「失われつつあるもの」や「輝きを失いかけているもの」「現状困っているもの」に焦点をあて、これらを再構築していくことを目的とし、この事業を報徳二宮神社の「まちづくり推譲事業」として位置づけ、報徳博物館での思想の研究・普及活動と並行しながら、現代における報徳の実践活動を通して、実践の学問として報徳の教えを次世代に継承していきたいと考え行うものであります。

荒地は荒地の力で。

　この推譲事業を行うにあたっては、単に行政等からの補助金や企業からの寄付に頼らず、その運営にあたっては自分たちで「自助」と「互助」での運営を執り行うものといたします。

　具体的には、企画ならびに初期の資金を報徳二宮神社で提供し、今後、各推譲事業を行ってまいります。また、これら推譲事業において得られた利益は、すべて「報徳推譲金」として、次の推譲事業資金として積み立て、やがて少を積んで大と為す「積小為大」なものにしていきたいと考えております。

＊推譲金はあくまでも、推譲事業資金の増強を目指すものであり、報徳二宮神社はこの事業において利益を享受するものではありません。
＊「経済」を成すには、一過性ではなく持続可能な、かつ徳が地域を循環する商いを行い適正な利益をあげることが必要となります。今後、どれを推譲事業の対象とするか否か。また、事業対象を実行する優先順位においては、当社が出資できる初期投資額の限度もあることから企画内容などを総合的に捉え、報徳二宮神社がその判断を行ってまいります。

経済なき道徳は戯言（たわごと）であり、道徳なき経済は犯罪である。

　この推譲事業において行う事業は、現在この地域が抱える諸問題の一助となり得るものを対象とし、これを解決するにあたり、この地域にある徳（農産物・海産物・伝統工芸品・観光・教育・福祉など）を見つけたり・再発見・再認識しながら、「売って喜び、買って喜び」の精神を基本として、この継続的な売り買いを通して、そこから得る恵を地域に循環させながら継続的に積んでいくことができる事業、その構築のみを対象とします。（目的）

　また、イベントや研修会・勉強会等はこの推譲事業達成のために必要な場合にのみ実施いたします（手段）。

報徳（ほうとく）

二宮尊徳翁が言う「徳」とは、ヒトやモノが持っている良さ（長所）・取り柄・可能性などのことを言い、報いる意味での「報」とは、こうしたヒトやモノが持つ徳を引き出したり、育てたり、活かしたりして、世の中のために役立てることであり、社会や経済など人々の暮らしに有用な価値を形成することを意味します。

推譲（すいじょう）

二宮尊徳翁はこの推譲とは、報徳の教えにある「至誠」「勤労」「分度」「推譲」の中にあるものです。簡単に言えば、天地や祖先の恩などをはじめ、さまざまな恩徳に感謝し、自己の収入の中から分度を立てて余財を生み、その余財の一部を他人（社会）に譲ることを意味しています。

「・・・上は王侯から下は庶民に至るまで、各々その天分にとどまり、節度を立て、勤倹を守り、分外の財を譲って報徳の資材とし、これによって荒地をひらき、負債をつぐない、貧窮をめぐみ、衰村を立て直し廃国を興す。その実施は一家からして二家に及ぼし、漸次、一郡・一国・天下に及ぼし、ついに万国に推し及ぼすのであって、これぞ天地人三才の徳に報いる所以なのである」 こう言われています。

報徳推譲金　ほうとくすいじょうきん

この報徳推譲金とは「まちづくり推譲事業」を行う際の原資となるもので、今後事業ごとに、その収益を「報徳推譲金」として積立をし、まちづくりへの資本といたします。

かつて、二宮尊徳翁は桜町領の仕法に着手する際、藩からの補助金を断り、荒地は荒地の力で徳を見出し、「心田開発：しんでんかいはつ」を行い、見事に再興を果たしました。現代においても、行政からの補助金などを当てにせず、自らの力（自助）で報徳金を積み、今困っていることへの推譲事業（互助）とすることといたします。

芋こじ　いもこじ

「いもこじ」とは、泥のついた芋を洗う時、桶の中で芋と芋が、ぶつかりあってお互いに磨かれることを意味しています。二宮尊徳翁（幼名 二宮金治郎）は、疲弊した農村を復興する際、「芋こじ会」というものを催して、村の人々が車座になって、自由に本音でトコトン話し合う場を設けました。 ここでは、私利私欲ない人々が集い、自由に小田原のまちづくりを語ることを意味しています。

心田開発　しんでんかいはつ

　かつて二宮尊徳翁は、荒れ果てた農村を復興する際には、今流で言えば、非常に緻密なマーケットリサーチを重ねた上で、10 年といった長期での非常に具体的な事業収支計画を立案し、これを実践したのでありますが、翁が目指した真の復興とは人々の心（意識）の改革・開発でありました。

＊二宮尊徳翁の一説を引用すると「そもそも我が道は、人々の心の荒廃を開くのを本意とする。1 人の心の荒廃が開けたならば、土地の荒廃は何万町歩あろうとも恐れるものはないからだ。

つまり、現代に置き換えるとするならば、本当にこの町に生きる子供たちの未来を憂いて、危機感を持ち、その責任を時代や社会や政治をはじめ、他企業や他人に押し付けることなく、また、既存の慣習やしがらみに流されることもなく、自らの強い自助の精神と推譲の精神で動く人が、1 人・2 人と少しずつでも増えていけば、この町の未来は必ずや切り開けるものとなる。そんな意味として解釈することができるものと思います。

よって、たいへん微力ではありますがご祭神の教えを信じ、**小田原は小田原の力で。**

神社関係者だけではなく、ご賛同いただける地域みんなの力でのまちづくりを目指します。

報徳之道克興国　報徳之教克安民　ほうとくの道よく国を興す。報徳の教えよく民を安んず。

　まちを良くすること。この意味、そして解釈にはさまざまなものがあろうかと思いますが、二宮尊徳翁の教えを、後に総合的に捉えて現在よく表現される「経済なき道徳は戯言であり、道徳なき経済は犯罪である」（道徳経済一元）という思想に基づいて考えれば、まちを良くするには「経済」と「道徳」が両輪となり、どちらも両立させつつ、どちらかに偏らないバランスのとれた考え方と実践が必要です。

　当社が行う「まちづくり推譲事業」の目的は、ヒト・モノ・カネができる限り地域に循環し、人々が心豊かに暮らせるまちづくりにあります。それは天・地・人、すべてに感謝して、そしてここから生まれた余財（徳）を地域社会に還元し、持続的な地域発展を形成していくことを目指すものであります。

　今後、具体的には今「失われつつあるもの」や「輝きを失いかけているもの」「現状困っているもの」「後世にも継承していきたいもの」このような地域の徳について検証し、これが再び輝くように企画をし、これを「売って喜び、買って喜び」の精神で商いをし、売上を上げて利益を生み（経済）、ここで得られた徳がさらに地域に循環していけるように（道徳）、微力ながら運営をしてまいります。

注）よく民を安んず＝人々に幸せをもたらす。

平成 22 年 9 月

報 徳 二 宮 神 社

宮司　草山　明久